

# 戦時戦後を思い出して

平間 愛子

中央三丁目

戦体験風化さるるはあまりにも惜しくて拙なき歌に残さん

(でも終戦でほっとしました)

東京へ送ればむぎむぎ燃すものと地方に置きし桐箆筒焼く

終戦時米兵上陸する前に(故郷)へ帰りぬ多くの女性は

(入手難の戦時、ようやく買えた総桐のタンスを知人の倉庫に保管していたのに、皮肉にも戦火で灰になってしまいました)  
昭和十九年

いざという時は急所を蹴ればよいと真顔で話す残りし人々

姉一家疎開せし後程なくて戦災で焼く寮の近くで

不安裡に進駐してきし米兵は紳士的にてほっとするなり

(赤羽の工兵隊)

(マッカーサー元帥の厳命か?)

軍服の知人の姿戸を開けし夢みたる後戦死の報あり

たまさかに酔いし米兵アパートのドアを次々蹴飛ばし行きぬ

(夢知らせ、姉の話)

(打越町二二共和荘、現在はなし)

機銃掃射近空にあり驚きて腰を抜かすも命拾えり

えり

ガス停止コンロを探し値を問えば「公定価格で売らぬ」と言

(需給の関係か)

トルーマンの顔写真載るピラ降りて終戦誘う記事に怒りぬ

配給の炭の粉集め麵ゆでし汁で丸めてタドン作りぬ

配給のスケソーダラの一切れを馳走と食べし戦時を想う

銭湯がありしと聞けば遠く迄足を延ばして連れ立ち行きぬ

漸くに着きても満員脱衣場籠の空くのを待ちし人々

籠空くを素早く見付け入りし風呂いももみ状態湯量少なく

買い出しで農家軒並み問いし時「土産あるか」と数軒の言う

街頭で白いハンカチ見付け買い僅か使うにすぐに破けぬ

(木綿少なく再生品で晒したもの)

終戦後シラミ防止と白い粉DDTを髪にかけらる

こつこつと貯めし虎の子パーとなり何とも悔し新円切替え

嬉しきはドサツと砂糖の配給を手に取り眼にし口にせし時

(現在ではとても考えられません)

日曜日徹夜勤務に出で来つし海軍想い誇り感じぬ

(戦時職場(国鉄)にて) 発表済み

輸送戦の犠牲となりて散り果てぬ哀れ十八の若き生命よ

(戦時職場(国鉄)にて) 発表済み

